PEACE NOW

第3号

闘う君と私の作るアジビラ

PEACE NOW　我々は、平和を求める。今すぐ、平和を！　我々は知っている　ベトナムの戦火を　ケントの虐殺を　水俣の殺人を　韓国や中国や東南アジアの人たちに対する差別を　会社のための殺人商品の生産を　学校という名で人をしばりつけもんをしていることを　軍隊や機動隊を養うために税金を収めていることを　民主主義を守るという人たちが言論の自由を奪うことを　学問の自由教授の地位を守るために学生を機動隊やお巡に手渡した人のことを　我々は知っている　これらはバラバラの別別のことではないことを　我々は知っている　これらの人が安保をつくり安保を維持しようとしていることを　しかし私自身もその一人ではないのか　今こそ　私は起ち上がる　平和のために

六月ですべては終ったのか？

六月二十三日安保条約は自動延長し、反対運動もひとつのサイクルを終え、今や、かの機動隊さえもが、大幅縮ケされて"安保"は、終わってしまったかのようである。しかし、君の周囲を見てみ給え。君が普通の市民生活を送っていることで、ベトナム侵略に荷担し、安保体制をささえていることはますますはっきりしてきました。我々は、今まで「人間らしく」生きたいと叫び、行動してきました。これは、六月が終ったからといって、やむものではないのです。すでに、至国で、新しい動き、新しいのろしが、起っています。眼を開き、耳を澄してごらん。君は気付かないではいられないだろう。君も、私も、「人間らしく」生きたいと声に出して言ってみよう。「人間らしく」行動してみよう。君の敵が誰なのか、君は身を以って体験するだろう。"敵"は、それほどに、君の生活、君の環境に、食い込んでしまっているのだ。

君自身の戦い、私自身の戦いを!!

我々が、大学に入学していらい　大学でいろいろなことが起ってきた。そして、多くの人々は、関心をもちながら黙ってみているだけだった。私自身もそうだった。しかし、それでは、いつまでたっても少しも変わらないことは、私が、君が　いちばんよく知っていることだ。一体　いつになったら私は起ち上がるのか、君は起ち上がるのか。大学が20億円の自民税をすれば"起ち上がるのか、誰かが殺されるまで待っているのか。そんなことがあるまで私は君は　無関心を装いつづけるのか。

我々が大学に学問をしに来たのなら、卒業証書をもらうためでないとしたら、大学で、何を学ぶかは、我々の勝手だ。カリキュラムなんて知らないよ。卒業、進級が、何で私をしばりうけるの。学内で何を話そうと勝手だ。思想が行動と切り離せないなら、政治活動をすることも自ら学問の自由といってきたものさえ奪りさることではないのか。

このようなあたりまえのことが、大学では通用しない。あたりまえのことがあたりまえでないと思われている。私も君も、あたりまえのことに気付かない。気付いても知らん顔している。あたりまえのことに気付かない自分、知らん顔しているずるい自分が、ベトナムでの殺戮に荷担し、学内のアウシュビッツ化に荷担しているのだ。私の戦いは、そんな荷担する自分との戦いなのだ。我々は、我々自身の荷担を認めないように起ち上がる必用がある。そして、生活のもとである大学を、職場を解体して、我々自身が管理していくことにより、この体制を変えていかなくてはならない。すべての権力を我々自身の手に!!

これこそ私の戦いであり君の戦いなのだ。

小小説　　中田実

アーアと身体を伸ばすと、さすがに疲れがでる。机の上の会計学の参考書が、スタンドの光でまぶしい。男は、ぼんやりとした気持ちで、鉛筆を投げると、傍らの、新聞をとり上げた。

「拓大で学生がリンチ死亡する」------運動部の評判はあいかわらずだな。俺が、身体を悪くして、あの部をやめてもう二年以上も前か。俺は、高校時代　甲子園にも行った高校の野球部で、目立たないほうだった。だから、やっと今の私立大に拾われて無試験ですべりこんだ。しかし　身体を悪くしちゃあしょうがないな。今は、会計士になるために、受験勉強か。会計士はもうかるからな。俺が、会計士になりたいのも　もうかるからか。実際勉強なんて　おもしろくない。世の中には、自分がもうかりもしないのに、野球だ何だと言っている奴がいる。全くたくものずきなこった。俺にとっちゃ野球だっておもしろくもなかった。ただ苦しかっただけさ。だが、甲子園の予選でいつも負けていた　高校のピッチャーが今じゃ　巨人のエースだってんだから、まんざら　俺に可能性がなかったとは言えまい。そんな希望もなく、教室では馬鹿にされる俺たちだ。やめたいといってくる奴をなぐりたくもなるさ。学校だって認めてるんだしな。ああ腹いい（完）